

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	このえ大森北保育園
施設所在地	大田区大森北4-9-7
法人名	株式会社なないろ

1. 活動のテーマ

<テーマ>

「声・音・動きの表現あそび」

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

日頃の朝の会や帰りの会での歌、ダンス、柔軟体操を通し、月の歌やダンスの振り付けを考えることに関心を示す子どもが多く見られる。また、楽器遊びにおいて、音の出方や響き、音が重なり合う面白さに気づき、進んで鳴らし方を工夫したり、身近な物を楽器に見立てたりして遊びを展開する姿もある。これまでの保育で大切にしてきた「声・音・動き」の三感覚を統合し、独自のプログラムをさらに発展させることが本テーマのねらいである。

大森北園の強みとして、4・5歳児クラスが扉を隔てて繋がっており、扉を開放することで十分なスペースを確保し、日常的にクラス交流を行える環境がある。これまでの活動で様々な視覚教具（マーカーコーンなど）を提示した際、子どもたちはそれを「声・音・動き」に結びつけて高い関心を示した。こうした教具の活用は、身体感覚や友達との距離感を意識しながら動く「計画性」を育てるのに非常に効果的である。

リトミックの実践では、保育者の太鼓や声掛けに合わせてマーカーコーンやバチを使い拍子を取り、困っている子には「大丈夫?」「次はこうだよ」と教え合う姿が見られる。音の強弱やリズムの違いに対して「みんなで楽しくするためにはどうすればいい?」と問いかけると、「大きさが全然違う」「せーので揃えればいい」など多様な意見が出るため、活動後には意見を共有する時間も設けている。このように、リトミック活動は子どもたちの表現意欲と探究心をさらに引き出す最良の手段であると考え、本テーマを設定した。

2. 活動スケジュール

- ① 5月～：すくわくプログラムへ参加するために視聴勉強会を実施。
- ② 7月～：本部責任者と共に活動内容とねらいについて視点合わせを行う。
- ③ 随時：担当者はリトミック研修にて実践を学ぶ。
- ④ 随時：園内にてリズム遊び（基礎）を実施。
- ⑤ 随時：視覚的用具・教具を使って実践を展開。
- ⑥ 継続：リトミック活動を通し、子ども同士で意見交換をしながら表現することの楽しさを共有する。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・環境：4・5歳児クラスの扉を開け、広々とした1つの部屋（異年齢交流の場）として活動を行う。
- ・道具：太鼓、バチ、マーカーコーン、ケンパリング
- ・教材：リトミック動画

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

1. 「リズム」について知る（対象：4・5歳児）

普段何気なく耳にしている歌や音には「リズム」があることを伝え、身近な2拍子を中心に、3拍子・4拍子のリズムを手拍子や身体の部位を使って表現した。「強」「弱」「中強」を軸に、音には大きさがあることを伝え、リズム打ちと共に強弱をつける活動を行った。

2. 道具を使ったリズム打ち（対象：4・5歳児）

手拍子等でのリズム打ちができるようになった段階で、マーカーコーンやバチの活用を提案した。まずは手拍子等で復習した後、マーカーコーンを使ったリズム打ちに挑戦。慣れてきたところでバチを渡し、持ち方や約束事を伝えた上で、音の強弱をつけたリズム打ちを道具を使って実践した。

3. リズムに合わせて手拍子をしながら大きな円を作ろう（対象：4・5歳児）

これまでのリズム打ちを応用し、室内を歩きながら手拍子でリズムを取る活動を実施。さらに、保育者の太鼓の合図に合わせて、子どもたち全員で一つの「大きな円」を作るといった協同的な動きを取り入れた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

1. リズムと強弱の表現



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

個々で考えながら行う活動よりも、友達同士が関わり合いながら進める活動の方が、子どもたちの理解や意欲が深まる様子が見て取れた。周囲の友達を意識し、保育者の指示をその都度聞くことで、「声・音・動き」をより意識する力が身についていると感じた。自信がないと声が小さくなってしまいうちもいるため、日頃から自信を持って発言・表現できるような働きかけを積み重ねていきたい。

また、「綺麗な円を作る」といった少し難しい課題に対し、子どもたち自身で「少し狭いんじゃない?」「引っ張りすぎじゃない?」と意見を出し合い、解決していく姿に驚かされた。子どもたちの「考える力」を育むためには、保育者がすぐに正解を教えるのではなく、共に考え、話し合える環境を整えることがいかに重要であるかを再認識した。

最初は活動に戸惑っていたお子さんについても、無理に参加を促すのではなく、興味を持つまで根気強く見守ることで自発的な模倣に繋がった。「できないから」と諦めるのではなく、その場において共に経験を積み重ねる機会を積極的に作っていくことを、今後も大切にしていきたい。